

上演4 2026年7月30日（木）4校目 近畿ブロック（大阪府） 金蘭会高等学校 『ドカ食い上等！～タラバガニ伝説～』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 星稜高等学校（石川県） 安西 蒼司
---	--

人と人の関わりの中で、今生き抜くことの大切さ、何気ない日常の幸せと平和について考えさせられる劇だった。

福引で日帰り温泉付きカニの食べ放題ツアーに当たったあかりは、友人を誘いバスに乗り込む。しかし、楽しい旅は一転、奇妙な展開を見せる。幾度となく繰り返される大阪のオバちゃんたちの小競り合いからの蟹味噌殺人事件！！次第に、自分たちはタイムリープしていることに気がつき、この状況を打破しようと試行錯誤を繰り返すが…

まず、討論で一番白熱したのはなんと言っても、斬新かつ痛快なドタバタコメディに対する称賛の声だ。何度見ても声をあげて笑ってしまう、どうしたらこんな展開を思いつくんだ！と終始、演出や演技についての意見が交わされた。

後半になるに従い、この作品は別の顔を見せ始める。実は、このバスには、異なる宇宙からやってきた人たちが乗り合わせており、その中には戦争や差別の問題に巻き込まれている人もいた。誰も助けには来ないという絶望的で悲惨な光景が語られるたびに最初、面白おかしく騒いでいたバスの雰囲気徐々に重いものへと変化していく。

別の次元で、繰り返される戦争、差別。これは決して私たちに縁遠い世界の話ではない。実際にこの地球という一つの星の規模で考えてみても、ウクライナやイランでは戦争が起きており、もっとマクロな視点で見ても外国人労働者に対する差別など私たちの身近でも起こっている。それにもかかわらず、私たちが自分事としてこういったことを考えたり発言したりすることが出来なかったのは、無意識に防衛心理が働いているからではないだろうか。いつ戦争が起こるかわからないし、自分の周りに差別があるということを知ってしまうことで不安や恐怖といった感情が襲ってきてネガティブな気持ちになってしまうからこそ、遠い次元の話だと遠ざけてしまったのだと思う。

しかし、いつまでも他人事として見ているだけで良いのだろうか？議論の中でも「悪いことはしていないけど、何か後ろめたい」という意見もあった。だからこそ、問題に真剣に向き合わなければいけないという義務感にも似た思いを抱かせてくれた。

やたらに解像度の高いキャラクターやエビカニダンス、アイドルライブなど観客と舞台が一体となり、大いに盛り上がる事ができた。演劇はこんなに自由でやりたい放題にやっていいんだ！ということを知り、新鮮な感覚を持つことができた。

明日も私たちの住んでいる場所が平和だとは限らないし、安全とは限らない。そして、私たちが笑っている対極に誰かが悲しんでいるという現実があるということを忘れてはならない。私たちが日々平和に生きていることに感謝しながら、作品で言う「向こうの私」にも恥じないようにしっかりと生きていこうと思わせられる劇だった。

